

美術館における学校との連携

～岡山市立オリエント美術館の取組～

1. はじめに

岡山市立オリエント美術館（以下、「オリエント美術館」という。）は、岡山市教育委員会所轄の社会教育施設として、令和4年度に学校連携推進事業を起ち上げ、これまでの校外学習や職場体験学習の受け入れ、ジュニア・オリエント教室の開催に加え、出前授業や美術部ワークショップなど、様々な教育普及を行っている。

まず、本事業の目的を次のように掲げている。

- ・オリエント美術館の美術考古資料を活用した学習プログラムを開発し、児童生徒の学習の充実を図り、文化や歴史に対する理解を深める。
- ・美術館や博物館を生涯にわたって活用し、学び続けるための基礎を身に付ける。

また、大学教授、小中学校教職員、オリエント美術館職員の計20名の構成員からなる「学校連携推進研究会」を発足し、教育現場の先生方のご協力を得て、教材や鑑賞支援ツールを開発したり、学芸員の専門的な知識や経験を生かした授業を展開したりするなど、子どもたちが多様な鑑賞体験や学習体験をすることができるよう研究を推進している。そこで、令和4年度から2年間の取組内容について紹介したい。

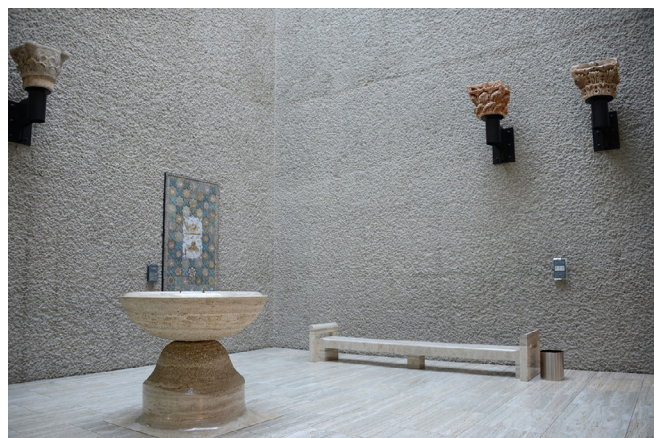
2. オリエント美術館の魅力

オリエント美術館は1979年に開館し、実業家・安原真二郎氏や岡崎林平氏らの旧蔵品を核とする約4,800点の美術考古資料を収蔵し、最も古いものは約50万年前の石器を展示している。オリエントコレクションが見られる東アジア・国内唯一の公立美術館で、開

館25周年記念事業として市民に広く寄付を呼びかけて取得した、当館を代表する作品アッシリア・レリーフ「有翼鷲頭精霊像浮彫」と呼ばれる古代アッシリア帝国の宮殿壁面彫刻は、古代オリエント美術の一つの到達点とされる世界的な文化遺産である。建築は最高裁判所を設計した



著名な建築家・岡田新一氏によるもので、中近東のエッセンスをちりばめた素晴らしい建築空間に多くの来館者が魅了されている。なかでも2階「光庭」は柔らかな自然光が差し込み、館内に響く噴水の音に来館者が時を忘れて過ごす姿が見られる。



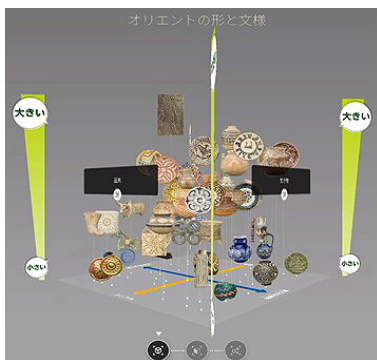
長寿命化改修工事に伴う約1年半の休館を経て2022年に再開館し、さらに見応えのある美術館となるように館蔵品展を一新し、親しみやすい身近なトピッ

クをテーマに展示している。1階には大型スクリーンを新たに設置し、臨場感溢れる映像を楽しむことができる。2階トイレにはラスター彩陶器手水鉢を設置している。ラスター彩陶器は金属の煌めきを帯びる中世ペルシア特有の製陶技法で、200年前に途絶えたものを岐阜県多治見市の陶芸家・加藤卓男氏が再現に成功し、七代加藤幸兵衛氏が継承している。幻のやきものを実際に使うことで、中世の美の世界を体感できる。また、美術館をより身近に感じられるような様々な活動として、講演会やワークショップ、ギャラリートークやギャラリーコンサートを行ったり、公民館へ出向いて講座を開いたりしている。さらに、オリエント美術館の周囲には文化施設が集中していることから「岡山カルチャーゾーン」と称して相互連携を図り、スタンプラリーやミュージアム鑑賞ノートを企画・製作して周遊を促したり、「おとなり美術館」として岡山県立美術館とサテライト展示も行ったりしている。



3. 鑑賞支援ツールの開発

博物館法の一部改正を背景に、全国の自治体や美術館・博物館などが収藏品・資料のデジタルアーカイブ化とその利活用を推進している。オリエント美術館はすでに収藏品管理システムを導入しており、1,000点以上の収藏品をホームページで公開し、誰でも閲覧可能となっている。そこで、学校教育での活用の促進を目的に、この収藏品管理システムに連動し、収藏品をよ



り魅力的に可視化するツールとして「みどころキューブ®」を取り入れることにした。「みどころキューブ」とは、大日本印刷株式会社（DNP）が開発した、アート作品や文化財をキューブ（立方体）状のインターフェースを通して、テーマや関係性等の多様な視点で鑑賞できる新しいビューアである。こちらの二次元コードより実際に閲覧できる。

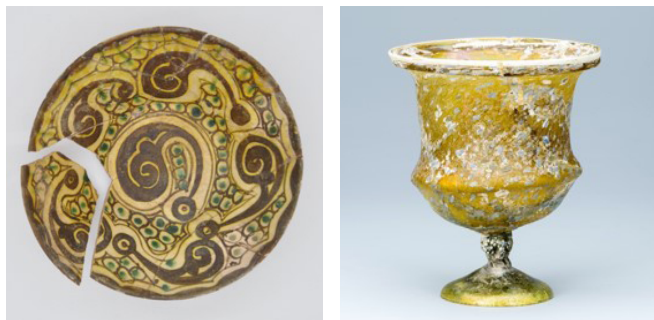


「みどころキューブ」の制作にあたり、「学校連携推進研究会」の構成員である岡山県小学校教育研究会岡山支会図画工作部会研究推進委員の先生方にご協力いただき、オリエント美術館の収藏品のうち、特徴的な文様をもつ作品50点を選出していただいた。次に、キューブ（立方体）の縦軸を大きさ（大きい・小さい）、底面を文様の特徴（複雑・シンプル・具体的・抽象的）、側面に関連するモチーフ（生き物・植物・道具・かき方）として設定し、子どもたちが興味関心のある作品を直感的に探し、さらに興味を広げていけるようなデザインとなっている。小学生にも分かりやすい文面で、自分で選んだ作品の詳しい解説を読んだり、解説欄で文様の拡大画像を観たり、クリックして収藏品管理システムにアクセスし、さらに詳しい情報を閲覧したりすることができる。「みどころキューブ」で各収藏品の文様・形・色・美しさなどに触れることで、作品の見方や感じ方、考え方などを深めるとともに他の収藏品にも興味をもち、「美術館で実物を観たい」という意欲や行動につなげていくことを学習の目的としている。実際に試行として岡山市立小学校1校にて「みどころキューブ」を活用した図画工作科の授業を実施した。一人一台のタブレット端末を使って、収藏品に描かれた文様の特徴・大きさ・テーマから子どもたちが自分の好きな文様を探して制作に挑戦し、新たな視点やアイデアを得るきっかけとなった。授業後のアンケートでは高い評価が得られ、「オリエント美術館に行ってみよう」という回答が多く見受けられた。早速、その週末に家族と一緒に美術館を訪れ、自ら家族に作品を紹介する子どもの姿も見られた。「みどころキューブ」を導入した施設

は、オリエント美術館が岡山市内初で、学校教育における本格的な活用は全国初である。令和6年度、岡山市立小学校3・5・6年の図画工作科で「みどころキューブ」を活用した授業を行う予定である。

4. 中学校との連携

「学校連携推進研究会」の構成員である中学校の先生方にご協力いただいた教材開発等の試みのひとつに、「美術作品の修復と継承について考えよう」という題材がある。この授業では、学芸員が実際に修復に携わった2つの作品について、その意図や修復することで分かった新たな発見などについて紹介した。



その後、阿修羅像や名古屋城、オリエント美術館「有翼驚頭精霊像浮彫」の3つの作品及び建築を通して「修復と継承」について考え話し合い、授業後には次のような感想が見られた。「傷が見えないように完全に修復するより、歴史が分かるようにあえて傷を残して修復することも大切である。」「修復することによって本来の価値を見出すこともあると思った。」「修復することで作品の成り立ちも分かるというところが、技術の進歩を感じてすごいと思った。」など、学芸員の話をお聴くことで関心が高まった。

また、岡山県中学校教育研究会岡山支部美術部会では美術教員の研修を兼ねて、市内中学校美術部生徒を対象に夏休みにワークショップを開催しており、これまで担当教員が題材を研究して講師を務めてきたが、新しい試みとして地元の作家の方を講師に招き、当館で開催した。

令和4年度は版画家、令和5年度は陶芸家を講師に



招き、計300名を超える参加があった。当館の展示作品を鑑賞後、テーマを基に制作に挑戦し、古代の造形美やデザインが、時空を超えて現代に生きる子どもたちの感性に響く魅力を実感した。さらに表現の喜びを味わってほしいとの願いから、完成作品を館内に展示して来館者の方々にもお楽しみいただいた。社会教育施設として、地元の作家や他校の生徒とつながる学びの場を提供することができれば、との期待も込めて本企画に至った。

令和4年度は特別展を鑑賞し、「身近な材料で版画を制作しよう」というテーマではがきサイズの版画を制作した。展示作品の中から好きなモチーフを見つけ、タブレット端末で撮影し、そのモチーフから発想を広げてドライポイントで表現した。版画家の提案でプレス機の代わりにパスタマシーンを使った点もユニークであった。令和5年度は館蔵品展を鑑賞し、「現代土偶を制作しよう! ~陶芸&クレイアニメ体験~」のテーマで陶芸による土偶制作に取り組んだ。展示作品を鑑賞してアイデアを膨らませ、オリジナルの土偶を制作した。さらに、他校の生徒と交流できるようグループを編成。協力してタブレット端末を駆使し、各自が制作した土偶のユニークなコマ撮りアニメーションの制作に臨んだ。完成したアニメは生徒作品の展示期間中に館内で上映した。作家の方から直接に指導を受けるとともに学校の枠を超えて生徒同士が交流した貴重な機会となった。実施後のアンケートからは高い満足度が得られたことが分かった。

5. その他の取組

現在、7つの国立美術館では「Social Story」^{ソーシャル ストーリー}を作成し公開している。これは主に発達障害の当事者とその家族や関係者をサポートする社会学習ツールのことで、社会的な状況や行為などを絵や写真を使ってやさしい文章で表現したものである。これを参考に令和5年度、岡山県立美術館が中心となり、岡山カルチャーゾーンに位置する5館（岡山県立博物館、岡山県立美術館、林原美術館、夢二郷土美術館、岡山市立オリエント美術館）で連携して「カルチャーゾーン・ミュージアムラーニング・プロジェクト」を起ち上げ、誰でも安心して美術館を楽しむためのガイドを作成した。初めてミュージアムを訪問する方、利用に不安を感じる方などでもミュージアムを楽しみながら過ごすことができるように、当事者や関係者、医療関係の専門家の協力を得て作成したガイドでは、写真や文章で入館から退館までの様子を説明している。建物の内外でのルールを事前に知ること、見通しをもって安心して過ごす手助けとなるように構成し、各館のウェブサイトで公開している。



また、小中学校の先生方にオリエント美術館の魅力を伝え、社会教育施設を活用した児童生徒の学びについて考えることを目的に、岡山市教育研究研修センターと連携して教職員対象の研修講座を設定した。初任者研修講座では学校連携推進事業の取組を紹介し、オリエント美術館体験研修講座では、学芸員によるギャラリートークやバックヤード見学を行った。さらに、ワークショップの体験も取り入れ、モノづくりの楽しさや教

育普及の取組について周知する機会となった。

岡山市教育委員会では広報用動画「教育長がきょうもいく」をYouTube配信している。岡山市教育委員会の取組である「やる気につながる好奇心の醸成」をキーワードに掲げ、教育長が実際に現地を訪れて取材するという内容で、オリエント美術館の魅力を動画で配信している。

6. 成果と課題

学校連携推進事業のすべての取組において、実施後のアンケートには児童生徒の肯定的な意見が多く見受けられ、美術館と学校が連携することで充実した学びが得られることを実感した。また、すでに美術館で観たことがある、知っている作品でも、授業の進め方によって新しい学びがあり、「もっと観たい」という児童生徒の意欲をかき立てることができることも分かった。学校において美術館の作品や資料、人材などを活用することで、よりよい授業につなげることができ、美術館においても作品や美術館の魅力の周知を図ることで、利用者の拡大や次世代の育成も期待できる。しかし、今回の実践において、学校（教師）が扱いたい作品と美術館（学芸員）が取り上げたい作品に相違が見られることも分かった。学芸員が歴史的、芸術的な価値を踏まえ「児童生徒に鑑賞してほしい」という作品が、必ずしも教師が学ばせたいことや児童生徒の実態に即したものと合致するものではないことが課題として挙げられた。今回は、美術館として取り上げたい作品よりも、児童生徒が興味関心をもつことが予想される作品を教師が選定した。そのことも成果の要因であると考え。このことから事前に児童生徒の実態や授業のねらいについて共有し、綿密に話し合っておくことの重要性も浮かび上がってきた。学校は事前事後の学習も含め美術館との授業の位置づけを明確にし、美術館は美術資料を教材として使いやすいように工夫することが求められる。その上で、題材を通してどのような資質・能力を育むのか、また、どのようにしてその姿を見取るのかなど、評価方法についても事前に共有しておく必要があ

る。児童生徒の目指す姿について学校と美術館がともに考えることで、より豊かな授業を創っていくことができると思う。

7. おわりに

この2年間、学校現場の先生方や教育研究研修センター等の関係機関にご理解、ご尽力いただき学校連携推進事業を促進することができた。オリент美術館に並ぶ太古の作品は、現代の生活で目にする洗練されたデザインとは異なり、かたちや色、タッチから当時の人々の願いや思いが込められたエネルギーや生命力を感じる。今回の実践を通して、子どもたちが学びを深め、見方や考え方を広げて作品のよさや魅力に気付くことで、遥か昔の文化に想いを寄せて作品に愛着をもち、その価値を感受するとともに新たな想像の創出へとつながることを実感している。先生方からは「オリент美術館の作品に触れたからこそ生まれた、独特な発想やアイデアが見られる。」という貴重なご意見もいただいた。

発達段階にある子どもたちにとって、異文化や多様な価値観に触れる経験は、単なる異文化理解にとどまらず、多文化共生の視点や地球的視野の育成にもつながり、国際社会の一員としての自覚を促すことにも発展できると考える。オリент美術館は岡山の地に居ながら古代の人類の営みや異国の文化や歴史に触れることができる貴重な美術館である。今後も学校連携を絶やさずことなく推進し、子どもたちや先生方に親しまれる美術館を目指して尽力して参りたい。